

国際化と歴史教育Ⅲ

豊田 憲一郎

I. はじめに

21世紀を迎え、国際社会は政治・経済・社会・文化のあらゆる面で急速にボーダーレス化が進んでいるのが現実であろう。いわゆる「グローバルゼーション」の進行であり、それは大きな時流となっているといえる。これは、この地球上のあらゆる面で相互依存化が進む国際社会の現実をかんがみ、避けることのできない流れであることはいうまでもない。

ところが、この「グローバルゼーション」による世界の一体化・標準化にアイデンティティ喪失の不安を感じ、その危機感をナショナリズムで解決していこうとする動きが一方でみられるのも事実である。特に、我が国における近年の歴史教科書及び歴史認識をめぐる問題はその一つの表れであると考えられる。すなわち、ここ数年来、我が国では中学校の歴史教科書をめぐる歴史教育問題が、教育界だけでなく、政界から広く一般市民まで巻き込んで展開されてきている。その動きは、1997年採用の中学校社会科歴史教科書における「従軍慰安婦」記述問題から本格化し、2002年度版の中学校社会科の歴史・公民教科書の検定及び採択問題で一つの頂点に達したといえる。

しかも、この問題は国内だけでなく近隣諸国（特に中国や韓国）¹の関心を呼んだのも周知のとおりである。このような状況は、国際社会の一員として、とりわけアジアの近隣諸国との歴史認識の溝を埋めていくことが求められている我が国にとって大きな課題であるといわざるを得ない。

今後、ますます未来志向型の国際関係を築いていかねばならない我が国において、この内外から問われている歴史認識形成を含む歴史教育をめぐる問題は重要な課題となってきたといえよう。

そこで、本稿では、このような現代的課題に応えうる歴史教育の在り方を中学校・高等学校における歴史教育を対象として、授業づくりのレベルからそのポイントと方策について考察してみたい。

II. 「開かれた歴史教育」のための方策

前稿²で述べたように、昨今の我が国の歴史教育をめぐる問題状況として挙げられるのは、「国民神話」形成に結び付きかねない「物語史観」、支配者層中心史観、男性中心史観、一国中心史観等であると考えられる。したがって、これらの問題状況克服のための方策が、これからの我が国の歴史教育に当然求められることになるし、またこれこそが急進展する国際化の時代にふさわしい「開かれた歴史教育」の在り方に結び付くものであるといえよう。

そこで、「開かれた歴史教育」実現のための具体的な方策について次に述べる。

まず、「物語史観」の弊害克服のためには、自国史を世界史の中ででき得る限り相対化し、客観的に見直しながら、科学的な自国史理解に結び付けていけるような方策を探ることであると考える。それは、「物語史観」の弊害であると考えられるのが、自国史の絶対化・特殊化という閉鎖性にあり、その危険性は戦前の皇国史観に典型的にみとれるからである。

次に、支配者層中心史観の弊害であるが、それは当時のごく限られた指導層の強者の論理で歴史が語られることにより、その結果被支配者である大多数の一般の人々への想像力が閉ざされてしまうということを挙げることができよう。いうまでもないが、弱者の立場に立つてこそ、強者の視点からは決して見えてこない豊かで生き生きとした歴史像が浮かび上がってくると考えられる。したがって、可能な限り被支配者層の視点を歴史教育に持ち込むことが問題克服の鍵となると考えている。

三点目として、男性中心史観の歴史教育では、ややもすると権力主義的で男性からみた一面的かつ全体主義的な歴史像育成になりかねないという弊害を挙げるができる。「開かれた歴史教育」とするためには、自国史の中の多様性・多面性を捉えさせる必要があるが、そのためには本来男性と対等に社会を形成しているはずの女性の視点をもっと歴史教育に反映させるべきではなかろうか。

最後に、一国中心史観の歴史教育の弊害についてであるが、それはややもすると一国完結型で独善的歴史観となり、排外主義的ナショナリズム育成に陥りかねないという点であろう。そこで、その弊害克服のためには、自国史を世界史の中に常に位置付け、他国家及び他国民との関連のもとに探究するといういわゆる「開かれた歴史教育」をめざすべきであると考えている。

以上の考察から、「開かれた歴史教育」実現のためには、「(1)客観的・科学的な自国理解のための歴史教育」「(2)被支配者層に視点をおいた歴史教育」「(3)女性からみた歴史」「(4)国際的視野に立つ自国史教育」の視点が欠かせないと考える。

そこで、本稿では「開かれた歴史教育」の在り方について、上述の中の「物語史観」の弊害克服のための方策である「(1)客観的・科学的な自国理解のための歴史教育」の視点をもとに、中学校社会科歴史的分野及び高等学校地理歴史科日本史Bを対象として、授業づくりのレベルからそのポイントについて次に述べてみたい。

III. 客観的・科学的な自国理解のための歴史教育

1. 教材構成上のポイント

「客観的・科学的な自国理解のための歴史教育」の視点としては、まず古代における「日本人」及び「日本国」の成り立ちに留意させたい。

それは、「日本」という国号が公式に定められたのは7世紀末であり、対外的に使用されたのは702年の遣唐使によることが、網野善彦³らの研究により定説化されてきているからである。すなわち、それ以前はこの列島に「日本国」もなかったし、「日本人」もいなかったわけであるが、教科書の叙述等からはあたかも縄文時代から「日本」が存在していたように受け取れるようになってきている。もちろん、それ以前は「倭」と称していたわけであり、さらにいえば、大多数の日本人が「日本国民」という国民的自覚をもつようになったのは明治時代以降であり、国民意識

は近代国民国家によってつくられたものであるということが定説化してきているということも前稿⁴で触れたとおりである。したがって、この列島に住む人々の姿を、「倭人」から「日本人」、そして「日本国民」へという移り変わりに視点をおいた歴史学習が、「客観的・科学的な自国理解の歴史教育」の方策として欠かせないとする。

なかでも、「日本人」の成り立ちについては、近年の諸学問の研究成果を生かした歴史教育を心がけたい。それは、いまだに日本人単一民族説及びそれに基づくナショナリズム論が跡を絶たないからである。

例えば、埴原和郎は、人類学の立場から日本人の形成について、次のように述べる。⁵

少なくとも二万年以上前から、アジア人は東アジア全域、アメリカ大陸、グリーンランドおよび太平洋地域に拡散し、それぞれの自然環境に適応してさまざまな特徴を獲得し、また多様な文化を発展させた。

こんにち「日本人」と呼ばれる集団は、このような壮大な民族移動の過程の中で形づくられてきた。したがってその起源はアジア人全体の移動や進化と密接な関係をもっている。

具体的には、この列島に東南アジア系と考えられる縄文人が古くから長期間にわたり生活していたところに、約2300年前から北東アジア系とみられる、いわゆる弥生人が水稲耕作の技術をもってアジア大陸から北部九州・山口地域に大量に渡ってきたとされる。この弥生人の渡来は7世紀ごろまで続き、その間に縄文人と混血しながら、この列島の各地に浸透していったようである。しかし、列島の辺縁部では渡来系弥生人の浸透がなかなか及ばず、その結果現代のアイヌ人・沖縄人には縄文人の系統が色濃く維持されているといわれる。

以上のように、縄文人という基層集団の分布に弥生人という渡来集団が混血しながら覆いかぶさるように分布したという「重層混血モデル」⁶は、現在、日本人の成り立ちに関してもっとも有力な仮説となっているようである。そこで、このような日本人の形成過程を視点として、縄文人と弥生人の生活や文化の関連および相違を、それぞれの人骨の特徴などと絡ませながら、歴史教育の場で扱うことによって、「日本人とは何か」を学習者に科学的・客観的に把握させることが可能になるのではないかと考える。

それでは、このような「日本人」の成り立ちを教育内容としてどう教材化し、授業づくりを行うかであるが、次に授業の大まかな具体案を示したい。

まず、モンゴロイドの人々の顔写真の資料をもとに、現在の日本人の顔と似ていると思われる顔写真を各自に探させ、導入とする。

次に、日本人の起源についての3つの説（「①人種交代説」「②混血説」「③移行説（連続説）」⁷）を紹介し、どの説を支持するかを問いかけ、支持する説とその理由について予想させる。

それから、「縄文タイプの顔」及び「弥生タイプの顔」の図と縄文人・弥生人それぞれの身体的特徴を記した資料をもとに、縄文人と弥生人のルーツについて考察させる。ここでは、「縄文人と弥生人の身体的特徴からそれぞれどんな環境や生業に向いていると思われるか？」「どちらの顔立ちのタイプが現在の日本人に多くみられるか？」「弥生人はどこからやってきたと思われるか？」「アイヌや沖縄の人の顔（写真資料を提示）は縄文人と弥生人のどちらに似ていると思われるか？」等の問いかけを中心としながら、考察を深めさせていきたい。

そして、最後に再度「日本人の起源についての3つの説のどれを支持するか？また、これ以外

の説を考えた人はいるか。」と問いかけ、シートに各自の見解を書かせ、さらに話し合わせることによって授業を締めくくりにすることにする。

つまり、このような教材の組み立てにより授業を設定することが、埴原の「日本人はしばしば単一民族といわれる。しかし、東南アジア系と北東アジア系の集団が混在し、それらの混血が現在もなお進行中であることを考えれば、日本人は混合民族というべきであろう。」⁸という指摘を学習者に気付かせることが可能になるのではないかと考えるわけである。

2. 授業実践上のポイント

前節で述べたプランはもちろん中学生・高校生を対象としたものであるが、このプランに基づいた授業は筆者が現在勤務している大学の学生を相手に実践してみた。つまり、大学生を中学生、あるいは高校生と想定して模擬授業として行ったわけである。⁹ 授業時の学生数は18名（男11名、女7名）であった。

この模擬授業では、教師の発問に対してももちろん発表もさせたが、必ず全学習者にシートに書いて答えさせるシート学習を基本とした。また、内容面ではポイントとなる日本人の起源についての3つの説以外に、学説ではない「単一民族説」を加えて4つの説として提示し、学習者に問いかけた。

発問形式で授業の流れを示すと、次のとおりである。

- (1) あなたは日本人のルーツ（祖先）についてどう考えていますか。
- (2) 資料の「モンゴロイドの人々の顔写真（8枚）」¹⁰は、我が国以外の地域に住んでいる人々の顔写真ですが、日本人と似ているとあなたが考える写真をいくつでもいいから挙げてください。
- (3) 日本人の起源についての4つの説（「①単一民族説」「②人種交代説」「③混血説」「④移行説（連続説）」）のうち、あなたはどれを支持しますか。支持する説を挙げ、その理由を述べてください。
- (4) 資料の「縄文タイプの顔」と「弥生タイプの顔」の図¹¹を比較してみましょう。
 - ① 「縄文タイプ」と「弥生タイプ」のそれぞれの身体的特徴から、それぞれどんな環境や生業に向いていると思いますか。
 - ② 日本列島の先住民はどちらのタイプでしたか。
弥生タイプはどちらの方からやってきたと考えられますか。
 - ③ どちらの顔立ちのタイプが現代の日本人に多くみられると、あなたは思いますか。
自分の顔立ちはどちらのタイプに当てはまりますか。
 - ④ 資料の「アイヌの人々の顔写真」¹²と「沖縄の人々の顔写真」¹³を比べてみてどう思いますか。
なぜ、縄文タイプに近い顔立ちの人たちが北の北海道と南の沖縄にみられるのでしょうか。
- (5) 日本人の起源についての4つの説のうち、あなたはどれを支持しますか。支持する説を挙げ、その理由も述べてください。また、これら以外の説を考えた人はそのことについて述べてください。
- (6) 学説でない「①単一民族説」が、我が国でしばしば出てくるのはなぜだと思いますか。

(7) 日本人も含まれるモンゴロイドの人々のルーツは、現在どこにあると考えられているのでしょうか。

次に、この授業における学習者である学生の反応を分析してみる。

まず、日本人の起源について提示した4つの説に対する授業当初の1回目と終盤の2回目の支持数は次のようになる。

	(1回目)	(2回目)
① 単一民族説	1名	1名
② 人種交代説	1名	3名
③ 混血説	10名	7名
④ 移行説 (連続説)	6名	5名
* ③と④をミックスしたもの	0名	1名
* 分からなくなった	0名	1名

両回とも「③混血説」と「④移行説 (連続説)」が多数の支持を得ているが、この結果は埴原がこの両説を日本人成立の両側面として考え直した方がよい¹⁴と指摘していることと適合しているといえる。

また、2回目に支持する説を変更したものが7名いるが、その内訳は次のとおりである。

(1回目)	(2回目)
○ ③混血説	→ ④移行説 (連続説)
○ ③混血説	→ ④移行説 (連続説)
○ ③混血説	→ ②人種交代説
○ ③混血説	→ ③と④をミックスしたもの
○ ④移行説 (連続説)	→ ③混血説
○ ④移行説 (連続説)	→ ②人種交代説
○ ④移行説 (連続説)	→ 分からなくなった

これらの内訳の中で、「③混血説」と「④移行説 (連続説)」間の変更と、「③と④をミックスしたもの」や「分からなくなった」という見解は、混血化を重視するか、それとも小進化を重視するかの思考の末の結果であると考えられ、前述の埴原の指摘と照らしても妥当な変更であるといえよう。

しかし、「③混血説」や「④移行説 (連続説)」から「②人種交代説」への変更者が2名出たことは、授業実践上検討を要すると考える。例えば、前述の発問形式による授業の流れの(4)の段階では、縄文タイプと弥生タイプの身体的特徴の比較学習となったが、この学習構成の一部に両方のタイプが混じっている特徴をもつ現代日本人のモデルを加える等の配慮が必要ではなかったかと考えるわけである。特に、中高生を対象とした授業づくりを念頭においた場合、このような選択肢を入れることにより、二者択一の弊害に陥らないような実践上の工夫が一層欠かせないだろう。

次に、授業の流れの中で筆者がポイントと考えた二つの発問に対しての学習者である学生の反応を拾ってみる。

一つは、「なぜ、縄文タイプに近い顔立ちの人たちが北の北海道と南の沖縄にみられるのだろうか。」に対する見解である。

- 沖縄とアイヌの人が、一番遠い距離にいながら似ていたということは、ルーツはみな一緒に、環境によって変わったのではないかと思う。沖縄とアイヌはどこかしら同じ環境の要素があったのではないかと思った。(女)
- 北九州や近畿地方は大陸と近いから、大陸から弥生タイプの人たちがやってきて、弥生タイプの顔立ちの人が現在も多いのだと思う。北海道や沖縄はあまり朝鮮の国々との交流がなかったため、土着民である縄文タイプの顔立ちの人が多く、また国交といってもシベリアや東南アジア系の縄文タイプの人ともものが多いそうだから。混血といってもあまり変化がなかったのだと思う。熊本も縄文タイプが多いと思う。(女)

この問いは一見矛盾した内容を含むものであり、日本人の形成についての科学的・合理的な理解が求められることになる。それだけに、この授業の成否を握っており、大きなポイントとなると考えている。

二つ目は、「学説でない単一民族説が、我が国でしばしば出てくるのはなぜだろうか。」に対する見解である。

- ペットが純潔の血統付きが高価で優れていると考えられるのと同じで、人間であってもそんな風に考える人がいるのだと思う。島国根性やヨソとウチの精神が表れる1つの例ではないかと思う。(女)
- 自分の国や日本人というものを特別にしたいからだと思う。美しい歴史を作りたいからそのようなことが出てくるのかも知れない。(男)
- 島国根性が加勢していると思う。「自分たちはどこの民族にも混ざってない。」という考え方をしているかもしれないと思った。(女)
- 他の民族じゃなく、日本独特の民族でありたいから。(男)
- 狭い島国で顔のつくり、言語も似ており、大多数が同じような感覚におちいるから。(女)
- 自分たちはすぐれた技術をもち、いろいろなことから特別な人種と信じたいから。(男)
- 「神国日本」もそうだが、選民思想があると思う。(男)

この問いは、中高生、特に中学生に対しては発達段階上やや無理があるかもしれないが、この説の虚構性を改めて確認させることにより、日本人の形成についての学習者の本質認識をはかりたいと考えるわけである。

さて、この模擬授業全体にかかわる学生全員の感想は、次のようなものであった。

- 日本人という、人の起源を考えてみるとかなりややこしいものだったと思った。考えてみたら、日本人の顔にも2つのタイプがいるということ自体が奇妙であり、そこから歴史を探っていくということは、実に興味深いことだと感じる。それと、北と南で同じ形成をした人種がいることも面白い事実だった。(男)
- いつもより書くことが多くて大変だった。だけど、自分の祖先のことについて、混合民族

だったとか知ることができてよかったと思う。でも、それについての意見はあまりうまく書けていなかったかも…。(女)

- すごく興味深い内容で楽しかったです。黄色人種だけでもいろんなタイプの人間がいたりして驚きました。機会があれば、もう少しやってください。(男)
- モンゴロイドの人たちは、どの国民も似ていると思った。北方系モンゴロイドと南方系モンゴロイドは環境によって顔が変化していったのを知り、ではなぜアイヌ人と沖縄の人のDNAは似ているのだろうと不思議に思った。(女)
- とても難しい内容ではあったけれども、興味をもつことができた。祖先というものを少しだけでも知ることができてよかったと思う。(男)
- 日本人のルーツや民族について普段考えることがないので、今日の授業はいい機会になったと思います。先生の話を書く講義式の授業も好きですが、自分の頭で考えて、色々な可能性や思いつきをまとめたり、削除したり、組み立てたりするのは楽しかったです。答えが分かってないから、考えがいがあるし、わくわくすると思いました。(女)
- 民族に関して興味がわいてくる授業だった。(男)
- 弥生タイプと縄文タイプとでは違いがあることがわかり、とても興味をひかれました。(男)
- 質問が抽象的で少し考えづらかった。私の場合、予備知識が全く無かったので、何を材料にしてどの分野で考えればよいのか。(定義づけが判らず、自分なりの仮説を立てる材料に乏しかった。)「現代の日本人」「日本人の起源」がそれぞれ、大体どの時代辺りまでを指すかが判らなかった。(女)
- 顔が似ていてもまったく違ういろいろな国の人達の顔があることに驚いた。しかし、もともとは同じ所に住んでいて、移動をくりかえし分かれたのではないかと思った。(男)
- 数々の設問で自分の意見を書くことによって、考える作業ができたのでよかった。(女)
- 写真等の資料を見て、昔やった小・中学校の頃習ったことを思い出しました。少し、勉強が専門的だったので知識が追いつけませんでした。(男)
- モンゴロイドについて勉強したが、最後に聞いた内容で、やはり、自分は混血説が適当だと感じた。(男)
- 資料がモノクロ写真ではよく分かりません。(男)
- 今回の授業で日本人の形成がどういうものか理解できた。日本人のルーツに4つの説があることも知らなかったし、自分の思う説を勉強して、自分の考えを身につけ、別の説を考える。友人と議論してみるのもおもしろいと思った。(男)
- 私の顔は弥生タイプだということも分かったし、勉強になりました。日本人は、混合民族ということも初めて知って、今日の授業ではいろいろな驚きがありました。(女)
- 今日の授業はとても書く作業が多かったです。黄色人種がどんな気候にも対応できてすぐれているのはわかっていましたが、その中でも縄文タイプ、弥生タイプにまで分かれるのは初めて知りました。モンゴロイドも移動した場所の環境に適応して顔や毛など、少しの違いが出てきたことも知った。おもしろかったです。(男)
- 今日の授業は難しかったけど、普段考えないような事を考える事ができたし、色々な事を知った。自分(日本人)のルーツを知ることがこんなに大変な事とは思わなかった。けど、色々な国の人の写真がおもしろかった。(女)

模擬授業という形式は、学生にとって初めての経験であったが、大方好評であったようである。すなわち、講義とは違い、この授業では、資料にある教材に語らせ、学習者である学生自身に思考させ、正解が定まっていない課題を追究させていったわけであるが、学生は新鮮な気持ちで取り組んでいたことがうかがえる。また、内容面でも、興味・関心をもち、自分自身の知的体験により、科学的な認識を深めていったといえよう。

ただ、中高生を対象とした授業を実践する場合、一部の学生の指摘にもあるように、発問や内容のより一層の具体化、パワーポイントの活用等による写真や絵図資料の明瞭化等が方策の上でのポイントとなると考えられる。

ともあれ、このように「日本人」の形成をアジア全体の中で捉える教材構成によってこそ、生徒たちに驚きを与え、課題意識をもたせるような授業が可能になり、さらに「科学的・客観的な自国理解のための歴史教育」に結び付くことになると考えている。この模擬授業で、その有効策を提案できたのではなかろうか。

IV. 終わりに

本稿では、国際化の時代にふさわしい「開かれた歴史教育の在り方」について、中等教育における授業づくりのレベルから論じてみた。

具体的には、「客観的・科学的な自国理解のための歴史教育」の視点のもとに、中学校社会科歴史的分野及び高等学校地理歴史科日本史 B を対象とし、中高生を想定した大学での模擬授業を行い、授業実践におけるポイントと方策について考察してみたわけである。

今後、さらに実験・実証的研究を深めていきたい。

注

1. 例えば、2001年5月8日に韓国政府は、教科書検定に合格した日本の中学歴史教科書について、歴史的事実の歪曲などがあったとして、35ヵ所（そのうち25ヵ所は「新しい歴史教科書をつくる会」主導の教科書）の再修正要求を、日本政府に行った。また、同年同月16日に中国政府は、「新しい歴史教科書をつくる会」主導の中学歴史教科書8ヵ所の再修正を、日本政府に要求した。2001年5月9日付及び同月18日付の『朝日新聞』（西部本社発行）参照
2. 拙稿「国際化と歴史教育II」『九州ルーテル学院大学紀要 VISIO』第29号、2002年、pp.41-43
3. 網野善彦『日本論の視座』小学館、1992年、pp.7-20
4. 拙稿「国際化と歴史教育II」『九州ルーテル学院大学紀要 VISIO』第29号、2002年、p.43
5. 埴原和郎「日本人の形成」『岩波講座 日本通史 第1巻』岩波書店、1993年、p.85
6. この用語は馬場悠男の次の論稿による。
馬場悠男「日本人の形成をめぐるモデル」『日本史研究最前線』新人物往来社、2000年、pp.34-35
7. 埴原和郎によると、人種交代説は、日本列島の中で人種が1回ないし2回入れ変わったという考えであり、混血説は、縄文時代以来の土着集団が、弥生時代以後に種々の近隣集団と混血することによって現代日本人を生じたという考えである。これに対して移行説は、縄文時代以来、日本列島では大規模な人種の交代や混血はなく、縄文人そのものが小進化をとげつつ現代人に変化してきたと主張しているという。埴原和郎「日本人の形成」『岩波講座 日本通史 第1巻』岩波書店、1993年、p.86

8. 同上書、p.104
9. この模擬授業は、2003年5月20日に筆者が勤務している九州ルーテル学院大学の「歴史認識論」の講義の時間に行った。
10. 『週刊朝日百科32 日本の歴史』（新訂増補）朝日新聞社、2003年、pp.1-37
11. 同上書、pp.1-40
12. 『少年朝日年鑑1988年版』朝日新聞社、1987年、p.131
13. 「沖縄・戦後50年の歩み」編集委員会編『沖縄 戦後50年の歩み—激動の写真記録—』那覇出版社、1995年、p.247
14. 埴原和郎「南から北から◎日本列島人のルーツ」『週刊朝日百科32 日本の歴史』（新訂増補）朝日新聞社、2003年、pp.1-37